

本日お読みいただいた聖書の箇所は、主イエスが弟子たちとエルサレムで最後にとった食事のようすを描いているところです。レオナルド・ダヴィンチの「最後の晩餐」の絵でも知られるこの場面は、イエスの最後の1週間を振り返るとき、際立って印象的な場面、これなしに受難週を語るができないという場面です。本日の13章を読むと、この食事会が行われる直前、夕方に、イエスは上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれ、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い始められました。ユダヤでは、結婚式の披露宴のような大きな食事会を催すとき、食事に招いた客人たちが気分よく食事ができるように、会食の前に手や足を洗いました。足を洗ったのは、そのころのユダヤ人の履物がサンダルのような粗末な履物だったため、泥や埃で足が汚れていたためです。その客人の足を洗う仕事は奴隷が行いました。しかし、この夕べは、イエスご自身が弟子たちの足の汚れを水で流し、腰の手ぬぐいで全員の足を洗ったのであります。なぜ、このようなパフォーマンスをイエスが行われたのか。それは、キリスト者として生きるということは、何よりも神さまの僕となって生きることである、ということをご自身が模範となることで示されるためであったと思われるのです。

今から10年ほど前のことですが、前任教会で働いていた時、ある壮年の信徒のお宅を訪問した時のことです。ご高齢になり、足腰が弱くなって、それまでのように礼拝にお越しになることが難しくなっていた方でした。その方はかつて建築委員長を務められ、現在の会堂を建てる際に大車輪の働きをされた方でした。ひとしきり昔の回顧話をしたあと、その方がふっと「ところで木村先生、ここで私の足を見てくださいますか?」と言われるのです。その方は長くテニスをされていた方でした。ただし、扁平足の症状がひどくなって、もはやテニスも出来なくなったと言われます。靴下をぬいで、素足になられたその足を見て、私は思わず手を伸ばして触ってみました。こんな足で教会までバスに乗って歩いてこられていたのかと思うと、私は思わず胸が熱くなったのであります。誰かに自分の裸足の足を見せるということ、それは、恐らく信頼関係なしにはできないことであろうと思います。主イエスは、その信頼関係をもって弟子たち一人一人の足に手を差しのべ、汚れたその足を洗い、手ぬぐいで水気を拭き取られた。シモン・ペトロではありませんが、「主よ、あなたがわたしの足を洗って下さるのですか?」と言って、立場が逆じゃないですか、と伸ばしたその足を引っ込めたくなる。その気持ちがわかるような気がするのです。

こうして、イエスが弟子たちの足を洗うという行為、洗足のわざが終わります。弟子たちは、イエスを囲むような仕方で全員が食事の席に着きました。ところで、ユダヤ人が食事をするとき、彼らは椅子に座って食事をしなかったのです。丈の低いテーブルに料理が並べられると、彼らは食卓を囲んで体を横たえ、左ひじをついて横になり、自由な右手で食物をとって食事をしました。ですから、レオナルド・ダヴィンチが書いたあの「最後の晩餐」の絵は、実際に行われた食事の場面ではなく、フィクションであります。ここで、23節を読むとイエスのすぐ隣には、イエスの愛しておられた弟子が席についていたと書かれています。肘をついて横たわっておられるイエスの胸元とは、右隣のことです。そこにイエスの愛しておられた弟子がいた。この弟子は、ヨハネ本人ではないかと見られています。ヨハネ福音書21章、すなわちこの福音書の最後の章を読むと、この愛弟子がこの福音書を書き記したと書かれています。この福音書では、ペトロよりもこの愛弟子のほうが優位に立っている。たとえば、イエスの復活を描くヨハネ福音書20章では、マグダラのマリアからの報告を受けたとき、この弟子のほうがペトロよりも早く走って先に墓についたとある。さらに21章で、ガリラヤ湖でひと晩中漁をしていた彼らの中で、イエスの愛しておられたこの弟子が復活のイエスを見て「主だ」と叫んでいます。この愛弟子はヨハネ福音書では、特別な位置を占めているのです。

しかしながら、このヨハネと並んで、もう一人注目すべき立場にいたのがユダです。本日の26節で「わたしがパン切れを浸して与える人が、その人だ」と主イエスが言われる人です。横たわっておられるイエスが、手渡しでパン切れを与えることができる座席は1箇所しかありません。すなわち、イエスの左側の座席です。そのように申し上げる理由は、ユダヤでは宴会の食卓の前に置かれる寝椅子は3人掛けだったからです。イエスは本日の食事の席で「テーブルマスター」として宴会の式次第をつかさどっています。皆さんの家庭では、誰がテーブルマスターをされていますか。ふだんはお母さんがその役を担っているかもしれません。しかし、こと鍋料理となると、ふだんは目立たないお父さんが登場し、いわゆる「鍋奉行」となってお椀に取り分けることをするのかもしれない。ところで、パレスチナを含む中近東において、食事の席で、テーブルマスターである主人が特別に客人に食べ物を与えるという行為は、特別な友情のしるしでした。たとえば、あなたがアラブ人の家に招かれて食事をしたとき、もしも、その主人が目の前の羊の丸焼きから、もっとも上等の厚手の肉をあなたに切り分けてくれたとしたらどうなるか。大変ですよ！それを必ず食べなければならないからです。ここでは、ユダが主イエスからパンを手渡しで受け取っている。ユダはイエスから愛されていたのです。しかしそれを見ても、イエスを裏切る弟子がユダであるということに弟子たちは気が付きませんでした(28節)。なぜでしょう。それは、イエスはいつもユダに、そのように食物を与えておられたからではないかと思われる。弟子たちには、それが特別なことに見えなかったのです。そのユダがイエスを裏切ると聖書は書きます。

このユダの裏切りに関しては、分からないことがいくつもあります。なぜ、ユダはここまでイエスに愛されていたのにイエスを裏切ったのか。さらに、この福音書によると、イエスは、ユダの裏切りを前もって察知しておられ

たように書かれています。それなのに、なぜそれを止めるということをイエスがなさらなかったのか。むしろ、28節を読むと、ユダに対して「あなたがやりたいことを、今すぐするがよい」とまで言っています。なぜ、ユダの裏切りを促すような言葉をおかけになったのか。ひとつ考えられることは、主イエスがユダの裏切りの中に、すべての人間が持つ罪を見ておられたということです。ユダは決して、これを読むあなたとは全く違う、どうにも救いようのない人間だ、などと福音書記者ヨハネは考えていなかったのです。実際、私たちも心の深いところで裏切るといえることがどういうことであるかを知っているのではないのでしょうか。誰かを愛し、また愛されるということを知り、純粋な愛の思いがどのようなものかを知っている。そんな私たちのなかに、妬みや不満や相手の冷たい反応に対する怒りの感情が沸き起こってくるのです。自分がこれほどあなたのことを大事に思っているのに、あなたはそれをわかってくれないという憎しみの感情さえ生まれてくるのです。人の心の中に忍び寄って来る、手の施しようのない「負の感情」が、だれかを愛すれば愛するほど芽生えてくるのです。

ユダもまたイエスを愛し、イエスを信じてこの人に人生をかけてきた弟子でありました。そのユダの中に広がっていた心の闇に関して、イエスご自身、どうすることもおできにならなかったのではないのでしょうか。イスカリオテのユダという人は、マタイ、マルコ、ルカの3つの福音書の中に出てくるイエスの12弟子たちのリストのなかで、常に最後に紹介されています。それは、おそらくユダが12人の中で一番最後にイエスの弟子となった人物だったからでしょう。しかも、イスカリオテとは「ケリオテの人」という意味で、ケリオテとはガリラヤではなく、南のユダ地方にある地名です。だとすると、ユダはイエスの弟子たちの中で、ただ一人ガリラヤ出身でなかったということになります。金庫番を担当するほど、まじめで責任感の強い人物でした。主イエスに特別な能力を認められていたこともあったでしょう。しかし、最初に弟子となったペトロ、ヤコブ、ヨハネのような親密な漁師たちのグループに入ることはできませんでした。もしかしたら、自分ひとり仲間外れだ、と思っていたかもしれません。それやこれやで、イエスへの愛がいつの間にか恨みや憎しみに変わっていったのではないのでしょうか。

あるいはまた、他の学者が言うように、もしも「イスカリオテ」という言葉が、当時のユダヤの国粋主義者である「シカリウス」という団体の名前だとすると、ユダはイエスの名声と民衆を動かす力を利用して、ローマ人をパレスチナから追い出そうと考えたのかもしれませんが。しかし、何年か一緒にイエスの運動に参加してみたものの、少しもローマに反抗しようという構えを示さない姿をみて、イエスに失望したのかもしれませんが。ユダはイエスのメシアとしての力に期待し、夢を抱いて弟子となった。しかし、ローマに対して戦うどころか、十字架へと進んでゆかれる様をみて失望してしまいました。その可能性もある。いずれにせよ、聖書はユダの裏切りの理由をつまびらかに説明していません。それは、私たち心の中にも、程度の差こそあれ、ユダがいるからではないのでしょうか。ユダは、決して自分とはまったく別世界に住む、自分とは関係のない人物ではありません。私たちもユダになりうる。イエスを愛していると言いながら、それ以上に自分を愛し、イエスに従うと言いながら、ややもすれば神から離れそうになる弱い私たちです。だからこそ、ユダの気持ちはあなたにもわかるはずだ、と福音書記者は語ろうとしているのです。

こうして、ユダはイエスからパンを受けると、席を立てて夜の闇へと出てゆきました。ユダはイエスを裏切ることになります。最後に、一つの問いを示してメッセージを終わります。ユダは地獄に落ちたのでしょうか？ K・バルトという教義学者はこの問いに対して沈黙しています。しかし、バルトはこう言います。「イエスを裏切ったこのユダのためにも、キリストは十字架にかかってくださったとわたしは信じる」と。

神さまは、自分を裏切るような罪人であったとしても、その人が救われることを、なお願われるお方です。イスカリオテのユダとは、決して私どもの知らない別世界に住む人物ではありません。そうではなくて、私たちの中にユダがいる。そして、そのような私どもをイエスは愛し、赦してくださっている。だから、ユダのようになってよいことではありません。そうではなくて、ユダのようにならないでほしい。自分自身の罪と戦うことをイエスは願っておられます。それほど深く、広く、大きい神の愛、主イエスの愛に対して、驚きたいのです。ひとり子を死なせるほどの神の愛に打たれるものでありたい。神の愛に敏感でありたいと思わされるのです。

お祈りいたします。